

—研究報告—

ライフインタビュー体験の共有がもたらす効果 —高齢者イメージとエイジズムの観点からの考察—

養原 文子¹, 畑野 相子¹, 岡 美登里²

¹滋賀医科大学医学部看護学科臨床看護学講座, ²滋賀医科大学医学部附属病院看護部

要旨

高齢者の強みというポジティブな側面に目を向けた対象者理解をするために、学生への課題にライフインタビューを採用した。そしてインタビュー後にグループワークを行い、個人の体験を共有させた。本研究では高齢者イメージとエイジズムの観点から、グループワークの効果を調査した。その結果、前年度の研究と同様にインタビュー実施前後では高齢者イメージは肯定的に変化し、エイジズムは低下を認めた。グループワーク実施前後においても、高齢者イメージは肯定的に変化し、エイジズムは特に「回避」の因子が低下をしていた。グループワークを通して、自己の学びを再確認する普遍的な体験をしたことや、情報を伝達し間接的に多くの高齢者に触れることで、高齢者イメージは肯定的に変化し、エイジズムが低下したと考えられる。高齢者の強みの理解には、高齢者へのインタビュー体験とその共有が重要であり、高齢者との関わりを避ける「回避」の因子が低下した意義は大きいことが示唆された。

キーワード: エイジズム、高齢者イメージ、ライフインタビュー、グループワーク

はじめに

平成 26 年度老年人口の割合は 25.1%¹⁾と超高齢社会にあり、在宅や医療施設等における高齢者看護はますます重要となってきた。1991 年国連総会で採択された尊厳・自己実現・参加・自立・ケアの 5 項目「高齢者のための国連原則」を踏まえた看護を展開するためには、看護者のエイジズム(高齢者差別意識)を排し、高齢者の持つ強み(生命力、英知、生きる技法など)というポジティブな側面に目を向けた対象者理解をすることが望まれる。肯定的な高齢者観の形成やエイジズムの減弱には、「高齢者から世話を受けた経験の有無」が影響している²⁾と言われているが、核家族化が進む中、近年の看護学生は高齢者に関わる体験が少なく、高齢者を理解することが困難である。そこで高齢者の発達課題の理解を目的とした授業に、生きてきた人生や、人間性に触れることができるようライフインタビュー(以下、インタビュー)を取り入れた。インタビューの効果については、高齢者の結晶性能力に触れることや、人生や生活についての深い学びが、高齢者イメージの肯定的な変化やエイジズムの低下につながる事が明らかになっている^{3,4)}。

昨年度の研究にて、インタビューが学生のエイジズムの低下や肯定的な高齢者イメージの変化に効果がみられたため、今年度はその効果をさらに得るためにグループワークとそれに基づくプレゼンテーションを採用した。

本研究では、インタビュー前後の高齢者イメージやエイジズム変化について追研究を行い、さらにグループワークを通して学生のイメージやエイジズムがどのように変化したのかを明らかにし、高齢者看護学の教授方法の基礎資料としたい。

研究方法

1. 調査対象: 4 年制大学看護学科 2 回生 60 名。
2. 調査期間: 2013 年 12 月から 2014 年 1 月に実施した。
3. 調査方法

1) インタビュー課題提示方法

祖父母や近隣住民など身近な高齢者 1 人に対して、インタビューを行い、インタビューを通して高齢者をどのようにとらえたのかレポートにまとめさせた。

インタビュー内容は、①結晶性能力を感じてもらうために漢字の想起、②人生における喜びや楽しみ、③健康に気を付けていること、④喪失体験とその対処方法とした。

2) グループワーク実施方法

インタビュー実施後に 5～6 名のグループを編成し、聞き取り内容を共有し、「インタビューを通して高齢者をどうとらえたか」をまとめ発表させた。そして、聞き取った内容の背景やメカニズムなどを今まで学習してきた理論や知識と関連させてパワーポイントにまとめるよう伝えた。

3) データ収集方法

インタビュー実施前後、またグループワークの発表後の計 3 回、学生の高齢者イメージとエイジズムを測定した。高齢者イメージに関しては、保坂らの 15 項目を用いた。この調査は SD 法が一般的であるが、変化を数値化するため、対極の間隔を 10 cm にしてチェックしてもらう Visual Analog Scale 法(以下、VAS)を用いた。数値が高いほど肯定的イメージとした。エイジズムに関しては、原田らの作成した日本語版 Fraboni エイジズム尺度(FSA)短縮版 14 項目(以下、FSA)を用いた。各項目について、

「そう思う」「まあそう思う」「どちらともいえない」「あまりそう思わない」「そう思わない」の5つの選択肢から、否定的項目では5～1点の配点をし、肯定的項目では1～5点の配点をして得点化した。数値が高いほどエイジズムは高いとした。そしてインタビュー前後、グループワークの発表後の結果を照合した。

4. 分析方法

高齢者イメージ及びエイジズムは、インタビュー前後、発表後の平均値を比較した。検定には Wilcoxon の符号付順位検定を用い、有意水準は5%とした。解析ソフトは SPSS22ver for windows を用いた。また学生がグループワークでまとめた高齢者理解に関する文章をデータとした。そしてその内容を、高齢者の捉え方について一文一意味として抽出しコード化を行い、類似性に基づいてカテゴリー化した。

5. 倫理的配慮

研究対象者には、文書にて、研究目的、自由意思による研究への参加、不参加による不利益からの保護、成績とは一切関係ないこと、プライバシーの厳守等について保障した。また前後の結果を対応させるため、学生が自身で選択した識別方法を用いた。データは記号化し、個人が特定できないようにした。実施にあたり、研究者が所属する機関の倫理委員会の承認を得た。(承認番号 24-101)

結果

1. 対象者の属性

同意の得られた学生のうち、インタビュー前後、グループワーク発表後の照合が出来なかったものを除外し、48名(回収率80%)を分析対象とした。

2. インタビュー実施前後のイメージ変化

実施前後のイメージ変化を表1に示した。実施前後で比較すると、15項目すべてが肯定的になり、そのうち11項目が有意に肯定的に変化した。

3. インタビュー実施前後のエイジズム変化

実施前後の因子別エイジズム変化を表2に示した。実施前後で比較すると、3因子全てが低下しており、そのうち「嫌悪・差別」、「誹謗」、総合得点が有意に低下していた。

4. グループワーク実施前後のイメージ変化

実施前後のイメージ変化を表3に示した。グループワーク実施前後で比較すると、15項目中13項目が肯定的になり、そのうち6項目が有意に肯定的に変化していた。

5. グループワーク前後のエイジズム変化

実施前後の因子別エイジズム変化を表4に示した。グループワーク実施前後で比較すると、「回避」と総合得点が有意に低下していた。

6. グループワークの発表内容

グループワークでの発表資料のうち、全体のまとめに関する内容を分析した結果、32のコードが得られた。そして、そのコードを8つに分類した。(表5)

表1. インタビュー実施前後のイメージ変化

イメージ	前	後	変化	有意確率
	平均値	平均値		
尊敬の念	77.85±15.604	83.81±16.000	5.96	*
役に立つ	74.23±17.367	77.42±18.348	3.19	
好き	69.94±20.450	78.50±18.091	8.56	*
明るさ	65.81±19.842	71.96±17.504	6.15	
積極性	58.00±17.449	70.02±17.821	12.02	**
颯爽	48.65±17.110	52.00±21.835	3.35	
強さ	54.44±25.883	66.63±23.649	12.19	**
温かさ	75.83±19.050	83.60±15.613	7.77	**
優しさ	75.29±16.390	84.10±15.343	8.81	***
上品さ	63.29±17.057	69.42±19.014	6.13	*
思いやり	67.81±19.527	78.68±19.116	10.87	**
プライド	66.46±17.856	72.02±19.125	5.56	
きれいさ	58.98±14.255	65.48±17.804	6.5	*
素直さ	51.17±21.124	62.06±23.446	10.89	*
考えの新鮮さ	38.40±17.684	49.46±20.751	11.06	*

*p<0.05 **p<0.005 ***p<0.001

表2. インタビュー実施前後の因子別エイジズム変化

FSA	実施前	実施後	変化	有意確率
	平均値	平均値		
嫌悪・差別	10.27±3.4	9.42±2.9	-0.85	*
回避	11.15±3.7	10.35±3.9	-0.8	
誹謗	7.23±1.8	6.52±2.0	-0.71	*
合計	28.65±7.408	26.29±7.557	-2.36	*

*p<0.05

表3. グループワーク実施前後のイメージ変化

イメージ	前	後	変化	有意確率
	平均値	平均値		
尊敬の念	83.81±16.000	81.83±17.162	-1.98	
役に立つ	77.42±18.348	79.69±17.153	2.27	
好き	78.50±18.091	79.23±17.316	0.73	
明るさ	71.96±17.504	74.79±16.068	2.83	
積極性	70.02±17.821	74.40±14.078	4.38	*
颯爽	52.00±21.835	60.31±20.356	8.31	**
強さ	66.63±23.649	74.17±17.275	7.54	*
温かさ	83.60±15.613	82.33±16.395	-1.27	
優しさ	84.10±15.343	81.33±17.132	-2.77	
上品さ	69.42±19.014	75.88±17.799	6.46	*
思いやり	78.68±19.116	77.54±17.260	-1.14	
プライド	72.02±19.125	75.52±19.138	3.5	
きれいさ	65.48±17.804	71.75±16.538	6.27	**
素直さ	62.06±23.446	65.83±22.594	3.77	
考えの新鮮さ	49.46±20.751	58.31±19.849	8.85	**

*p<0.05 **p<0.005 ***p<0.001

表4. グループワーク実施前後の因子別エイジズム変化

FSA	前	後	変化	有意確率
	平均値	平均値		
嫌悪・差別	9.42±2.9	9.57±3.4	+0.15	
回避	10.35±3.9	9.51±3.6	-0.84	*
誹謗	6.52±2.0	6.22±2.0	-0.3	
合計	26.29±7.557	25.31±7.994	-0.98	*

*p<0.05

表5. グループワーク発表内容

若い世代との交流の必要性	高齢者が若い世代と接する機会が必要 経験や知識を若い人に伝えるという役割がある もっと孫たちが高齢者に積極的に関わるべきだ 高齢者にとって過去を話すことは大切なことだ
喪失体験を受容しながら生き生きと過ごす姿	老化を悲観的に捉えるのではなく、肯定的に捉えている 喪失体験を受容し、前向きに生活している 老化に向き合い、自分なりの生き方を持っている 保守的なのではなく、やりたいことをたくさん持っている 生きがいを見つけ活発に行動している 過去にとらわれず、今を生き生きと前向きに過ごしている 毎日を有意義に生活している 生活の中で日々努力をしている 生活機能を自立させようと取り組んでいる 生き甲斐を持ち、自立した生活が送れるよう努力している 高齢者が社会の中で自立しようとしていることを理解する
心は元気	自分はまだまだできている人が多い 体の衰えはあるが、心は元気
積極的な社会との交流	人とかかわりを大切にする人が多い 家族以外とのつながりも多い 実際の高齢者は積極的である 高齢者独自の経験を生かし、社会に貢献している
豊富な知識	私たちが思ってもいないような回答を得た 先入観を持たず、個々の高齢者を理解する 経験も知識も豊富
孫への愛情	家族、特に孫を好きな人が多い 私たちのことをとても大切に思ってくれている
尊敬の念	人生の先輩として尊敬して接する 高齢者はプライドを持っている
避けられない喪失体験	私たちが出来ると思っても、高齢者にとっては難しい 老化による喪失体験により、自尊心が傷つきやすい 身体機能や流動性知能の衰えは避けられない 生活に不便さを感じている

考察

1. インタビューがもたらすイメージやエイジズムへの効果

高齢者イメージはインタビューの実施前後で、11項目が有意に肯定的に変化していた。またエイジズムも総合得点を含めて2つの因子が有意に低下をしていた。前年度の研究³⁾と同様に、本研究でも、イメージでは「好き」「強さ」「きれいさ」「素直さ」「考えの新鮮さ」の5項目が、またエイジズムでは総合得点が同様に肯定的に変化していた。学生はインタビュー実施前に、授業の一貫として高齢者疑似体験を行っている。高齢者疑似体験は、身体の不自由さを体験するものであり否定的な高齢者観を抱きやすい⁵⁾とされており、学生は否定的なイメージを抱いていた可能性がある。しかし、そのような否定的なイメージが、実際に話を聞き、喪失体験を抱えながらも生き生きと生活する姿や、活動性や積極性など、高齢者

の持つ強みに直に触れたことで高齢者イメージが肯定的に変化したと考えられる。他の先行研究でも桶田ら⁶⁾や林ら⁷⁾が“健康的で元気な高齢者”と接する経験が、肯定的なイメージ形成や理解に重要な役割があることを明らかにしており、本研究でも同様の結果が得られた。

高齢者の強みに直に触れ、肯定的な高齢者イメージを育むためにも、インタビューは今後も教育方法として重要な位置づけにあると言える。

2. インタビュー体験の共有がもたらす効果

高齢者イメージはグループワーク実施前後で6項目が有意に肯定的に変化し、エイジズムにおいても「回避」の因子と総合得点が低下していた。イメージが肯定的に変化した6項目の中で、「積極性」「強さ」「上品さ」「きれいさ」「考えの新鮮さ」の5項目は、インタビュー、グループワークを通して段階的に肯定的に変化をしていた。学生は、高齢者が“避けられない喪失体験”に直面しながらも、その“喪失体験を受容しながら生き生きと過ごす姿”や、“積極的な社会との交流”など、前向きに日々の生活を送っている姿に触れていた。そのことがイメージの「積極性」や「強さ」などの項目の肯定的な変化に繋がったと考えられる。また学生は自分の想像を上回る“豊富な知識”も感じていた。これは学生間で情報の伝達をし、情報量が増える中で、1人のインタビューの時よりもさらに「考えの新鮮さ」を強く感じたのではないかと考える。

高齢者は積み上げてきた人生が長い分、同じ暦年齢であっても、高齢者個人の身体・心理・社会的状況には大きな個人差があることが知られている。高齢者の真の実像に迫るイメージや態度形成を支援していくためには様々な年齢や健康レベルの高齢者と接する機会を持つ必要がある⁷⁾。今回、1人の学生が実際にインタビューを行ったのは1人の高齢者であるが、グループで話しあい共有する中で6人の高齢者の生活や、考え方、喪失体験やその工夫を知ることができた。さらに発表を聞く中で多くの高齢者について知ることができたと考えられる。粕谷ら⁸⁾はグループワークの効果として、学生が自己の体験を振り返り他者に話すことで自分の看護を振り返り、他者の事例を聞きながら思考することで、体験できなかった知識や技術について確認し自己の学びとする機会になると述べている。グループワークの中で、自身のインタビューについて振り返り、それを踏まえて他学生の学びを聞く中で、より高齢者理解が深まったことや、共有の中で間接的に多くの高齢者に触れたことが、学生個人の高齢者イメージやエイジズムの変化に繋がったと考える。

インタビュー前後ではエイジズムの「回避」の因子は変化しなかったが、グループワーク実施前後で「回避」の感情が有意に低下をしていた。回避因子は「個人的に

は高齢者とは長い時間一緒に過ごしたくない」「できれば高齢者と一緒に住みたくない」といった設問にみられるように、高齢者との交流を避け距離を取りたいという感情成分を示す概念として位置づけられている⁹⁾。グループワークで回避の感情が有意に変化したのは、今回のインタビューが自身の祖父母に行った学生が多く、聞き取らる中で祖父母から自分たち“孫への愛情”を直に感じたことや、インタビュー内容を学生間で共有し、まとめる中で表5に示すように高齢者との交流が必要であるという考察にいたったことが影響していると考えられる。

肯定的な高齢者理解には高齢者と実際に関わり、その人間性や強みに触れることが重要である。高齢者理解に欠かすことのできない、高齢者との関わりを「回避」する感情が低下したことの意義は大きいと考える。

結論

高齢者理解のためのライフインタビューと、学生の高齢者イメージおよびエイジズムとの関連において以下の点が明らかになった。

ライフインタビューが、高齢者の強みにじかに触れる体験となり、高齢者イメージを肯定的に変化させ、エイジズムを低下させる。さらにインタビューの内容を、グループで共有することが、自己の学びの再確認する普遍的な体験となった。情報を伝達し共有することで高齢者イメージを豊かにし、それがイメージの肯定的な変化や、エイジズムの「回避」因子の低下につながった。

高齢者の強みの理解には、高齢者との交流とその体験を共有するグループワークが重要であり、高齢者との交流を「回避」する因子が低下した意義は大きい。

謝辞

学生のインタビューを快く受け入れてくださった皆様、また調査研究にご協力いただいた学生の皆様に心よりお礼申し上げます。

文献

- 1) 内閣府：平成26年度高齢社会白書。2014-11-11(入手日)
http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2014/zenbun/pdf/1s1s_1.pdf.
- 2) 村田日出子, 小野田真弓, 高野真由美：看護学生のエイジズムに関する要因 - 老年看護学概論及び実習前後のエイジズムの変化 - . 神奈川県立よこはま看護専門学校紀要, 4, 12-17, 2008.
- 3) 畑野相子, 簗原文子：高齢者の結晶性能力の受け止め方と看護学生のエイジズム及び高齢者イメージとの関連. 滋賀医科大学看護ジャーナル, 12(1), 35-39, 2014.
- 4) 簗原文子, 畑野相子：高齢者理解を目的としたライフ

インタビューの効果 - エイジズムをアウトカムとした学びの分析 - . 滋賀医科大学看護ジャーナル, 12(1), 27-30, 2014.

- 5) 高岡哲子, 留畑寿美江, 服部ユカリ：看護学生の「高齢者疑似体験」後の高齢者観と教育プログラムの検討. 旭川医科大学研究フォーラム, 6(1), 33-42, 2005.
- 6) 桶田小百合, 熊田ますみ, 大瀧康平, 神谷きらら, 桐山美咲, 齋藤かな子, 曾我あゆみ：健康高齢者との関わりによる看護学生の高齢者イメージ. 岐阜医療科学大学紀要, 8, 7-15, 2014.
- 7) 林彩乃, 曾田信子, 杉浦伸一：第一学年と第4学年の比較による看護学生の高齢者に対するイメージと知識・理解、コミュニケーションの特徴. 日本看護医療学会雑誌, 13(2), 45-55, 2011.
- 8) 粕谷恵美子, 渡辺恭子：慢性看護学実習終了後の振り返り学習における学び - リフレクションを通して得た知識と実習目的との比較 - . 足利短期大学研究紀要, 30, 41-46, 2010.
- 9) 原田謙, 杉澤秀博：日本語版 Fraboni エイジズム尺度 (FSA) 短縮版の作成 - 都市部の若年男性におけるエイジズムの測定 - . 老年社会科学, 26(3), 2004.